

異文化理解の授業を行うにあたって

酒井英樹

(信州大学)

1. はじめに

本稿では、英語科において異文化理解を扱う際に心がけたいことを整理します。異文化理解において、認知（文化に関する知識を身につけること）、情意（異文化に対して関心を寄せたり、感情を持ったりすること）、行動（異文化間コミュニケーションを行うこと）の3側面が大切であると言われています。この3側面に沿って、何を扱うか、どう受け止めさせるか、どう関わらせるか、について考えます。

2. 何を扱うか

(1) 教材の選択

学習指導要領では、英語科の教材の選択について「英語を使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化や自然科学などに関するものの中から、生徒の発達の段階及び興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げる」としています。

ここでいう「英語を使用している人々を中心とする世界の人々」は、英語を母語として使用する人々、英語を第二言語として使用する人々、英語を外国語として学ぶ人々の3種類に大きく分けることができます。「国際共通語としての英語」という点から考えると、取り上げる文化は、英語を母語とする国や地域だけでなく、第二言語として使用したり、外国語として学ぶ国や地域にも目を向ける必要があります。

しかし、中学校の英語授業で世界のすべての国や地域の文化について取り上げることは不可能なので、特定の言語と文化を扱う際でも、他の言語や文

化への関心を持てるようにするとよいと思います。

また、文化には、食べ物、服装、工芸品、踊り、祭りなど目に見えるものから、風習、生活様式、制度など目に見えにくいもの、そして、考え方や思いなど目に見えないものまでが含まれています。「見える文化」を通して、そこで生活をしている（生活をしてきた）人々の思考や情意（見えない文化）に注意を向けられるとよいでしょう。

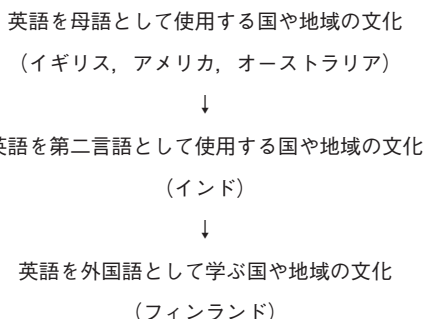
(2) NEW CROWN (以下NC) で扱われている題材

さて、NCではどのような題材が扱われているのでしょうか。題材の中から、文化に関する主なものを選んで次の表のように整理してみました。

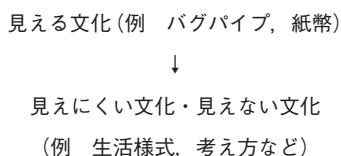
表1 NCで扱われている主な題材

その国・地域の英語の位置付け	見える文化	見えにくい文化・見えにくい文化
母語	1-6 イギリス、バグパイプ	1-8 アメリカ、学校生活 2-1 ハワイ、フラ 2-6 オーストラリア、先住民の歴史 3-6 アメリカ、人権運動
第二言語	2-8 インド、紙幣	2-8 インド、映画・言語
外国語		3-2 フィンランド、森との生活

1年生から3年生まで、基本的には、次のような広がりを見せています。



また、扱われている文化については、次のように配列されています。



生徒の発達段階に応じて、扱う題材も少しずつ深みを増すように配列されています。ALTの出身国・地域の文化など、教科書以外の題材を授業に取り入れるときも、こういったことを考慮しつつ、生徒の興味・関心に合ったものを選ぶとよいでしょう。

(3) コミュニケーションに役立つ文化の理解

英語科で異文化理解を扱う際に注意したいことは、授業の中で指導し、理解したかどうかの評価の対象になるものと、題材として扱うが、必ずしも習得を目指さなくてもよいものがあるということです。

前者は、外国語科の目標の中にある「言語や文化に対する理解」の「文化」であり、「言語や文化についての知識・理解」という評価の観点によって評価の対象となるものです。「コミュニケーションに役立つ文化の理解」と言うこともできます。「言語や文化についての知識・理解」の評価の観点について、「一般常識的な知識や百科事典のような内容ではなく、技能の運用で求められる、言語の背景にある文化に限って評価する。すなわち、理解をしていないとコミュニケーションに支障をきたすような文化的背景を評価の対象とする。」（下線筆者，国立教育政策研究所，2011，p.34）とされています。これらにはメールや手紙の書き方、日付の表現方法、姓名の言い方、コミュニケーションのマナーなどが含まれる

と考えます。

一方で、NC Book 2のLesson 8でインドの文化について扱っているような、「インドの方がハリウッドより映画制作数が多い」という知識は、コミュニケーションに支障をきたす類の情報ではありませんので、評価の対象とはなりません。

3. どう受け止めさせるか

(1) 多様なものの見方や考え方

異文化理解をねらいの1つとした授業では、さまざまな文化に関する情報を得るだけでなく、文化について考えたり、判断を行ったりしながら、多様なものの見方や考え方を受け入れられる態度を育てたいものです。英語科においては、英語を使って、聞いたり話したり読んだり書いたりします。これらはその背景にある、思考・判断を表現するという認知行為に他なりません。思考力・判断力・表現力は、学力の3要素、すなわち①基礎的・基本的な知識及び技能、②知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等、③主体的に学習に取り組む態度、のうちの②にあたるものです(学校教育法第49条)。

これを異文化理解の点から考えると、英語科において育てたい思考力や判断力、表現力に重なることに気がつきます。つまり、異文化を理解しようとする際、自文化の視点だけでは、誤解や偏見の気持ちが生じる可能性があります。まず自らの見方や考え方が自分の背景にある文化に影響されていることを意識し、相手の視点に立って考えるという、批判的で柔軟な思考力・判断力を持つことが重要なのです。このように考えると、多様なものの見方や考え方を受け入れる態度を育てるためには、次のような力をつけさせることが必要と考えられます。

- ①自分の見方や考え方を批判的に捉えるために、自分の見方や考え方を理由とともに表現すること
- ②異なるものに対して柔軟に応答するために、多様なものの見方や考え方をもちながら考えたり、判断したりすること

(2) 指導例

Uluruに関するレッスンの例を取り上げて、もう少し具体的に説明しましょう。(NC Book 2 Lesson 6, Use Read)。第一段落では、(自分たちを含む)多くの人々が、どのようにAyers Rock (Uluru)を見ているのかが書かれています。

Ayers Rock is a famous place in Australia. (中略) Every year, 350,000 people visit the rock. Ayers Rock is just a place to visit to these people.

ステップ1：自分たちの見方や考え方を意識する

Ayers Rockの写真を見せて、“How do you like Ayers Rock?” “Do you want to visit Ayers Rock too? Why?”などと質問し、自分の見方や考え方を理由とともに表現させます。生徒からは、観光客の視点から述べられた、次のような回答が返ってくるでしょう。

回答例：

- ・I want to visit the rock because it is beautiful.
- ・It is very big. I want to look around at the top of the rock. I think we can enjoy the view.

ステップ2：相手の視点に立って考える

次に、Uluru周辺の先住民であるアナングの人々たちの視点に立って考えるように促します。“The native people, the Anangu, live near the rock. Let’s think about their feelings toward the rock.”と言ってから、“Do the Anangu think it is beautiful?” “Do the Anangu enjoy looking around at the top of the rock?”などと、生徒の回答を取り入れながら質問します。つまり、自分たちと同じようにアナングの人々は考えているのだろうかという生徒に問いかけ、意識をアナングの人々に向けさせます。

第二段落では一転して、アナングの人々の視点で書かれています。そこで、次のような英文を生徒に渡し、空欄に入る語句を考えさせます。

The rock is a/an [] place to the native people, the Anangu. They have their own name for it, Uluru. They started to live near the rock over 40,000 years ago. They deeply respect the rock and everything around it.

2文目からの内容を考えて、先住民の思いに立つように促します。多様なものの見方や考え方を持ちながら考えたり、判断したりするものを経験させるのです。次は、空欄に入る語句とその理由の例です。

回答例：

- ・important…アナングの人々は、岩に独自の名前をつけているぐらい、大切にしているから。
- ・precious や special…岩と共に住んできて、昔から敬っていることから、アナングの人々にとって特別なものであることがわかるから。

同じものでも、文化的背景によって異なって見えている場合があります。Ayers Rock/Uluruに対する異なる視点を題材に、ものの見方や考え方の多様性を意識させていきたいものです。

(3) ALT とのティーム・ティーチング

ALT とのティーム・ティーチングは、異文化理解の授業を行う絶好の機会です。ALT の役割の1つとしてALTの言語・文化に関する情報提供が挙げられます。特に、ALTは見える文化の紹介だけでなく、見えにくい文化・見えない文化まで掘り下げて説明できます。どのような行動をとるか、どんな考え方をするか、どのように感じるかというような質問をし、ALTに答えてもらうとよいでしょう。

例えば、NC Book 1のLesson 8では、アメリカの学校生活が扱われています。そこで、アメリカ出身の先生に次のような質問をしてみました。()で示した回答を見ると、教科書に書かれていない情報を得ることができます。

Q1: Did you eat lunch in a school cafeteria?
(Yes.)

Q2: What is served at a school cafeteria? (It depends on whether it's an elementary school or JHS/HS. Main choices for the day or a la carte.)

Q3: Did you eat lunch in a cafeteria, buy lunch, or bring lunch from home? (We always ate in the lunch room/cafeteria. We "bought" or "brought" depending on the weekly menu.)

さらに、Which did you like main choices for the day or a la carte? Why? と尋ねてみれば、ALTの「ものの見方や考え方」を生徒に紹介することができます。

4. どう関わらせるか

教室内で学んだことを活かして、外の世界とつながることも重要です。異なる背景を持つ人々と交流する中で、その文化に関する知識を得、多様なものの見方・考え方ができるようになっていくことでしょう。ICT活用の機会が増え、10年前と比べて活動が工夫しやすくなっているといえます。

(1) ICT 機器を持って教室の外へ

デジタルカメラ、ビデオカメラ、タブレット型コンピュータ、ノート型コンピュータなど、運びやすい機器が利用可能となっています。生徒に持たせて、教室外で活動をさせ、教室で報告させるという活動を実施してはいかがでしょうか。

例えば、NC Book 3のLesson 3 USE Mini-projectには、「先生にインタビュー」という活動があります。このような活動の際には、ICT機器を生徒に持たせ、インタビューの様子を録画させます。教室に戻ってきてから、録画した映像を見ながら生徒同士でインタビューの様子を報告させるとよいでしょう。音声だけではなく、相手や自分たちの表情やしぐさなども記録することができますので、やりとりに加えて、立ち振る舞いについても振り返らせることができます。

学校によって状況は異なると思いますが、ALTや他の英語の先生だけでなく、ALTの友人や、英

語を話す他教科の先生、地域に住んでいる人たちなど、インタビューの対象を広げるとよいと思います。

(2) ICT 機器を使った交流

ICT機器を使うと、オフラインとオンラインの両方の交流が可能となります。メールやビデオ・レターの交換など、送受信のタイミングが同時でなくてもよいオフラインの交流は、準備に時間をかけることができたり、繰り返し聞いたり読んだりすることで相手のメッセージが理解できたりするという利点があります。一方、テレビ電話などのオンラインの交流は、その場で考えて英語を話したり、相手の言うことを理解したりしなくてはならないため、難しくはありますが、相手とつながっている感覚を得ることができます。生徒や環境に応じて、交流の方法を選ぶことが重要です。

ある学校で、オンラインの交流活動を実施していました。そこでは、映像と音声だけでなく、絵が描けるソフトを同時に立ち上げていました。イラストを描きながらやりとりを行うことで、互いに意思をうまく伝達し合っていたようです。ICTの活用については、工夫の余地がたくさんあると思います。

(3) 交流する相手

異文化理解というと海外で暮らす人々との交流を思い浮かべがちですが、ALTとの関わりも大切にしたいものです。一緒に給食を食べたり、調理実習をしたり、遠足や修学旅行に行ったりして、授業内外で活動する機会を増やすとよいと思います。

また、自分以外の級友、教師と交流する際にも、「相手を尊重し、理解し、行動する」という異文化理解の基本姿勢が必要となります。先述したインタビュー活動は、場合によっては、他のクラスの生徒や、他学年の生徒を対象にしてもよいと思います。クラス内・クラス間での交流、学年間での交流、学校内での交流、地域内での交流というように、足元の異文化理解を大切にしたいものです。

【引用文献】
国立教育政策研究所(2011).『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料(中学校 外国語)』